

小規模多機能型居宅介護「サービス評価」 総括表

法人名	特定非営利活動法人 楽	代表者	柴田 範子	法人・事業所の 特徴	<p>ひつじ雲は、「人格の尊重」「生活の継続性」「社会参加」「自主性の向上」を理念としています。利用者一人一人が、その方の持っている力を発揮しながら過ごせるようにお手伝いしていきます。しっかり食べるということを始め、生活の中での動作ができるだけ続けられるように、その方にあった方法で体力作りをしていきます。</p> <p>近年では、地域の中でお一人暮らしの方も多く、必要な時は、生活全般に関わり支援させていただく事が多くなっています。また、法人設立以来地域と繋がるような活動をしてきました。令和5年1月からは、川崎市の「要支援高齢者等の介護予防・重度化防止モデル事業」に参加することとなりました。これからも、地域とのご縁が繋がり続けるような活動を行っていきます。</p>
事業所名	ひつじ雲	管理者	工藤 一枝		

出席者	市町村職員	知見を有するもの	地域住民・地域団体	利用者	利用者家族	地域包括支援センター	近隣事業所	事業所職員	その他	合計
	1人	人	4人	人	1人	1人	人	2人	人	9人

項目	前回の改善計画	前回の改善計画に対する取組み・結果	意見	今回の改善計画
A. 事業所自己評価の確認	<p>小さな変化、いつもと違う様子などの気づきが介護職としては重要。意見としてあげられた食べる事に関して取り組む。利用者全員の食事の形態、姿勢、口腔内の状態を把握しデータ化する。そのデータを基に課題を上げる。例えば姿勢の調整をしてしっかり食べられるようにする。口腔内に課題があれば歯科治療につないでいつまでも自分の歯で食べる事を大切にするなど、健康を維持するための取り組みを行っていく。また、行った内容や結果の記録をきちんと行う。</p>	<p>改善計画を立てた後で、「食事観察チェックリスト」をもとに、利用者の方々の食事に係るアセスメントを行った。普段きちんと観察できているか、情報を共有できているか、課題の改善のために働き掛けができているか、振り返る機会となった。一見問題のなさそうな方でも、現状を知る事で予測されるリスクについて早めに対処していこうという姿勢がもてた。職員全体で問題提起して解決するために考えるという機会を持つことができた。</p>	<p>テーマを決めて個人チェックを行うことは、職員の意識の常駐化につながり、課題として取り組むことができている。自己評価で「よくできている」が多い項目もあるので、強みと捉えて、職員のモチベーションにはとご意見いただく。</p>	<p>勤務期間が長い職員が多い。自己評価の9個の評価項目は、自己評価の段階で自ら一年間取り組んできたことの振り返りになる。できたことと評価する事もできるが、できていない点も多数上がってくる。できない現実を把握する事は冷静にできるが、改善点を意見として挙げる事が少ない傾向にある。経験でクリアしていくことも多いのだが、できていない項目が例年同じような内容なので、常に問題意識をもって意見を出し合える事業所にしていきたい。定期的な意見交換の機会を今以上に作っていく。</p>
B. 事業所のしつらえ・環境	<p>コロナウィルスの感染予防を続けることは言うまでもない。事業所の内、外の清潔を整えていくことも継続する。換気も継続しており、玄関や窓を開ける事も多い。どなたでも出入りしやすい、職員</p>	<p>新型コロナウイルス感染症の予防のために日中こまめに換気を行っている。通常の掃除と共に消毒を徹底している。蔓延を防ぐために決めたことを実施する事ができた。しつらえなどは、清潔感</p>	<p>入りやすい工夫とはと、問いかけがあった。以前玄関の内側が暗く入りづらいとご意見を頂いたことあり、照明を工夫することとした。清潔感を保つことも意味があるとお伝えする。</p>	<p>事業所としては、新型コロナウイルス感染症の感染予防として、現在の予防対策を継続していく。換気、手洗い、消毒など様々な感染症の予防にも通じると理解している。合わせて環境整備なども継</p>

	に声を掛けやすい環境を続けていく。来訪者の方の手指消毒のお願いも継続する。	を保てるように整えている。	環境は設備だけではなく、職員の様子を評価していただいた。事業所に出向いた際、気持ち良い対応をしている。利用者の方々の落ち着いている様子から居心地の良さを感じるとご意見いただいた。	続けていく。今回の評価で職員も環境である事が再認識できた。話しかけやすい印象や、丁寧な対応など、職員全員が自覚をもって対応できるようにしていく。
C. 事業所と地域のかかわり	新型コロナウイルスの感染予防を理由に交流活動を無いものとするのは、今まで培ってきた絆が切れてしまう事が懸念される。感染予防を徹底し、時代にあった関わり方があるはず。定期的にカフェや集まりの場を開催する事で交流は続き、必要な時に手を伸べる事ができると信じ継続する。	新型コロナウイルスの感染予防が何よりも大切な時期であった。とはいえ、高齢の方々が交流の機会をなくすことの、影響の大きさも想像できることであった。感染予防を施してのカフェや、集いの場を開催することを継続した。	新型コロナ感染症が蔓延する事で交流の場が減ってしまった中、カフェや集いの場を継続している事に評価を頂いた。様々な相談ごとにも馴染みの関係であれば、相談しやすいのではとご意見いただく。	「生活支援コーディネーター」活動と共に、「要支援高齢者等の介護予防・重度化防止モデル事業」にも参加する。職員がより地域に出かける機会が増えていく。地域の高齢の方々の元気が続くための活動の提案や、気軽に相談事ができるような関係作りを行っていく。
D. 地域に出向いて本人の暮らしを支える取組み	事業所だけで利用者本人を支えるのは難しい。その方が介護保険を利用しながらも地域で暮らし続けたいという思いや自信を持ち続ける事ができるように地域の方の力を貸していただくように働きかける必要がある。これは永遠のテーマではあるが、やはり情報収集に尽きる。職員の視点を外に向けて、小さな情報を積み上げる。訪問の時話かけてくれた方と次回も話せるようにひつじ雲の職員である事を伝える。ご本人の気持ちを伝える役目を担う。その方が地域の一員である事を伝え続け地域活動への参加に協力する。	利用者の方々の日常生活の中で、郵便受けに新聞を取りに行く、近くのスーパーに買い物に行くなど習慣になっている事があるが、一人で行動に不安がある場合、ひつじ雲の職員が少しサポートする事で継続できることがある。自宅からでたご本人を近所の方が見かけて声を掛ける。あきらめないうで気持ちを外に向ける事を続けられるように支援している。地域の集まりなど交流の機会がある場合も、周囲の方が誘いやすい状況をつくることで継続できている。	送迎は徒歩圏内であれば、利用者の方と、職員と一緒に歩いて行うということをしている。それが当たり前前の光景であると、近所の方々は見てくださっている。介護保険のサービスを受けていても、生活圏の中で自分の力で活動する姿は、地域で暮らす一員である事のあかしと捉え、支援していく。	日常的に、送迎時など地域の方と顔を合わせる機会をもつことを続けていく。新型コロナウイルス感染症の分類が変わる事で、地域活動も少しずつ増えてくるものと予測される。ひつじ雲で送迎など一部サポートするだけでも、活動に参加でき楽しみが増える事を支援する。活動中は、知り合いの方に気にかけてもらえるような連携がとれるようにする。利用者の方の応援団を作っていく。
E. 運営推進会議を活かした取組み	今まで以上に、推進会議が地域の方と、気軽に意見交換できる場にしていきたい。ひつじ雲がおこなっている事をきちんと伝える。「生活支援コーディネーター」という役割が地域でしっかり機能	推進会議の場で、地域の気になる方の事を共有できることがある。実際の支援の方向性など、地域包括支援センターと協働し、生活支援コーディネーターと一緒に動くという体制ができてきている。	生活支援コーディネーターの役割を地域の方にお知らせする機会となり、徐々に認知して頂けるようになってきている。個人情報保護の観点から、情報の扱いには注意を要するが、地域を考えると	運営推進会議は、事業所がどのような方向性をもって活動をしていくか、それが地域のニーズや期待にあっているかを確認するために、とても貴重な機会である。日常の中での関わりの積み重ね

	<p>するように、地域の皆様にお伝えする場としたい。</p>	<p>地域の方に参加して頂けることで、事業所でできる事、または地域の方に力を貸していただきたい事など身のお伝えできる良い機会となっている。</p>	<p>いう場にしていきたい。地域の方が気軽に発言できる場になっているとご意見いただく。</p>	<p>と共に、設問 F にある防災、災害対策は、推運営推進会議の場で議題として取り上げ、検証を繰り返し突然の災害にもできるだけ対処できるようにしていく。</p>
<p>F. 事業所の 防災・災害対策</p>	<p>「事業継続計画」を作成する。事業を継続するために必要な手立てを計画することは、実際に災害が起きた時の支えになる。職員全員が理解できるように伝えていく。定期的な避難訓練を行う。初期消火などの手順を一人一人が訓練し、習得できるように継続する。コロナの感染縮小時などタイミングを見て地域の方を避難訓練にお誘いする。</p>	<p>「事業継続計画」作成に取り掛かっているが、作成途中である。災害を想定し、対応することや予定したことが実際できるか、法人として職員に周知したり、改善点を挙げていくということをしていく必要がある。</p>	<p>災害時事業所は頼りになりそうかという設問に対して、参加者の皆様真剣に向き合ってくださいました。「頼りになる」のご意見としては、2019年の台風による水害の時、ひつじ雲の避難への対応について町内と協働できたこと。この時は台風の進路予測や時間帯など避難準備のための時間も対応できた。「頼りになる」が疑問と言うご意見は、事業所自体の対応で大変なのではないものでした。こちらも現実的には想像のつくことで、頼りになるというよりは、地域に頼り助けてもらうことが多いと考えています。しかし、事前準備をしたり、日頃から、地域と連携が取れるような体制作りはしていく。</p>	<p>事業所の防災計画、及び訓練をもっと地域の方々にも知っていただけるように広報する必要があります。様々な災害が予測される現代、事業所のみで対処できることは限られている。地域の方々と事前の協力体制がとれていると大変心強い。 ハザードマップに即した、災害対策を整えていく。避難訓練など定期的に行い、計画書の見直しなど現実的なものにしていく。避難訓練に地域の方をお誘いする機会には、非常食の試食など実際に体験の機会を提案していく。</p>